

地理学研究に対する経済基盤説の意義 (その1)

加藤 英生

人文社会教室

(1986年9月5日受理)

The Significance of Economic Base Theory for Geographical Study (1)

Hideo KATO

Department of Humanities

(Received September 5, 1986)

The purpose of this paper is to consider the viewpoint of geography on which we are founded in discussions of the significance of economic base theory for geographical study. Especially we examine: the descriptive category that prescribes inclusively the substance of geography; two concepts of uniform region and nodal region; the role that both systematic geography and regional geography fulfill in regional study.

まえがき

現在、経済基盤説 (Economic Base Theory) という用語によって総称されている研究領域には2つの異なった起源があり、しかも長い間それぞれの系譜の領域で独立して研究が進められてきた。そのひとつは1920年代後半以降のアメリカ合衆国において、急激な都市化に伴って発生した都市問題への対処という現実的な要請から、主に地理学者、都市計画家、それに連邦住宅局などの公的機関が中心となって研究が開始されたものであり、この領域では専らN/B比率という地域乗数の経験的特性の究明とこの乗数の応用に係わる諸問題が取り上げられてきた。もうひとつは1950年代に入ってから地域経済学者達によって盛んに研究されるようになったもので、こちらの領域では主としてケインズ経済学の乗数分析を地域 (あるいは都市) 経済に適用するための理論的な諸問題が考察されてきた。

このように経済基盤説に関する研究は、地理学、都市工学、経済学などの学問分野にわたって学際的に進められてきた。そして、これらの研究の大部分はやはりこの仮説の生命ともいえる地域 (都市) の成長予測とその応用に係わる問題を取り扱ったものであった。この傾向はとりわけ都市工学と経済学においてははっきりしており、地理学が都市の機能分類や類型化、地域の移出入均衡の問題解明などに研究の範囲を広げていったのに対して、現在でもそれぞれ地域の土地需要 (土地利用) や経済変動の予測そのものを直接問題にしているのである。

このような事情もあって、経済基盤説の有用性をめぐる議論はさまざまであるが、それらを評価する視点は次の三つに大別して考えてみることができよう。第一は、予測手段としての有効性についてである。これについては多くの批判があり、しかも現在のところ、それらの批判に応えるだけの成果が挙げられているとは言い難いし、さらりとまだ完全に論破されたわけではなく、片方では有効な予測手段になりうる可能性のあることを示唆する研究成果も報告されている。したがってこの有効性の問題をはっきりさせるためには、予測手段としての概念的枠組みや具体的な分析用具の吟味を繰り返して行ない、実証研究を積み重ねていく必要があるといえよう。第二は現段階の経済基盤説が地理学の研究に有用な概念や尺度などを提供できるかどうかということである。しかし、このような評価の仕方は、現在われわれに要請されているところの経済基盤説の発展に資する度合という点では極めて小さい。この当然の帰結として、第三の視点が問題に取り上げられるべきであろう。その視点というのは経済基盤説の概念的枠組みのなかに、地理学の研究成果である地域概念などの諸概念を反映させることによって新たな有用性の可能性を探るものである。これは、かつて地域経済学者達がケインズ経済学の諸概念の導入によって経済基盤説の再構成を試みた際の視点と同じものである。

本稿では、上述のような有用性の評価をめぐる視pointsの整理を踏まえて、単に経済基盤説が地理学研究に対してもっている意義について考察するだけでなく、経済基盤説に地理学の諸概念を反映させることによって新たな発展の可能性を探ってみることにした。そのために、まず

現段階の地理学研究について概観し、次いで経済基盤説のこれまでの経験的分析の成果と問題点を整理し、これらの作業を通して明らかになってくる経済基盤説の新たな課題についても考えてみることにした。

1. 地理学の研究

(1) 地理学の記述的基本概念

科学において方法と対象とは、相互決定の関係にあって、単に理論的には同等の権利を有している。しかし実践的には、戸坂(1929, p.22)がいうように、研究という実践的動機において、方法は対象に対して何らかの優越を示しうるのである。したがって方法はまず第一に研究の方法として現われてくるが、対象を媒介にして方法概念の運動を徹底していくと、「方法はもはや研究方法でもなく又学問構成でもなくして、更に、根本的な対象規定として現われて」(戸坂, 1929, p.17)くるのである。

そうではあるが、ここで特に注意しておかなければならないのは、科学の方法は対象との相互決定の関係において、世界を反映する手続きとなりえたときに初めて対象と同じ程度の権利をもつようになる、ということである。方法は単にそれだけとしてみるならば、主観の能動的な構成作用に他ならないから、それが対象と同等の権利をもつためには、科学が反映するところの世界それ自身、その意味での科学の対象そのものに基づいていなければならないのである。この限りにおいて、方法はやがて対象を規定し、その科学の性格を決定するようになるのであり、逆に対象はついに方法を規定し、科学を分類する原理になることができるのである。¹⁾

しかも、この対象の区別を原理とする科学の分類は、物質的世界そのものの歴史的過程における構造を反映す

ることによって初めて真に意味をもつことになる。もう少し具体的に言うと、「自然が歴史的発達によって社会を生み、そこで初めて自然と社会とが平行したり交渉し合ったりすることになった」(戸坂, 1935, p.170)という客観的事実に基づいて科学を分類するときだけに有用な原理になりうるのである。さらに言うならば、人間の社会は自然のなかに存在し、自然との相互作用がなければ成り立たないけれども、両者の間には絶対的ではないにしても根本的な相違が存する、ということである。つまり、それは人々の活動によってつくりだされた独自の社会的有機体であって、自然とは質的に異なった、物質的世界の特殊な一領域を形成しているのである。

上述のような認識に基づいて初めて対象の区別を原理にして科学を自然科学と社会科学とに分類することになる。ところが、戸坂(1929, p.61)によれば、分類は一方において“現実的でなければならない”ことが要求されるが、他方において“常に何らかの分類原理によって与えられる”必要があり、この2つの矛盾した分類概念それ自身の要求のために、対象の区別を原理とする分類もやがて現実存在する諸科学の間の秩序に適応しなくなり、かくて事実上、方法によって分類(対象規定)されることになるのである。

要するに、すべての科学は同じ一つの物質的世界に対して、それぞれに固有の記述的基本概念によって規定された切断面をとりだし、この切断面(対象領域)において、独自の方法(概念構成)にしたがって認識の対象を構成し、それを介して世界の一部分を考察しているのである。²⁾ 逆に、このように方法的に限定されることによって個別科学は、特定のものについて一つのまとまった理論体系を構築することが可能になり、それを説明することができるようになるのである。したがってこの限定は、

* 1 このような結論に達する詳細な論考の過程については戸坂(1929)の方法概念の第二部参照。

* 2 戸坂(1929)は研究の方法に平行する対象について次のように論述している。「二つのもの(筆者注、常識と学問的知識)は全くその原理を——出発を——異にする。一から出発してそのまま他へ到着することは出来ない。吾々は常識から出発し、何となれば如何なる人も Dasein としてまず第一に常識者であるから——、そして若し彼が学者であるならば、一つの転換によって学問研究に向わねばならぬであろう。この転換以後に発生した学問的概念ではなくして、正にそれ以前に吾々が持っていた常識概念(筆者注、例えば生物学の研究対象は生物であるという意味の対象の観念)が研究の対象となるならば、それが構成以前の対象概念なのである。」(pp.18~19)

ところで、この引用文のなかで指摘しておかなければならないのは、「常識者」から「学者」への転換は、彼が「常識」に代えて「学問的知識」から学問研究に向わねばならぬことを意味するだけであって、その時期にはまだ研究の対象は学問の内容として方法によって構成されたものとなっていない、ということである。しかしそのとき彼はすでに原理を「常識」から「学問的知識」へ移行させているのであるから、対象もまたそれに対応して常識概念から他のものへ変化していなければならない筈である。この点について戸坂は何も言及していないので、ここで考察しておくことにする。

「学者」が「常識者」から区別される理由は、彼が「学問的知識」から学問研究へ出発することであった。そうだとすると、この「学問的知識」の内容が何であるかがまず第一に尋ねられなければならないであろう。というのは、一般に学問的知識は学問研究の成果として研究作業の最後に獲得されるものであるにもかかわらず、それが学問研究の最初に必要とされるからである。そのような知識は、その学問の本質を包括的に規定している記述的基本概念において他にはありえないであろう。なぜなら、方法によって研究の対象が構成されるためには、それ以前に学問は事実として存在していなければならないからである。このようにみえてみると、「常識者」から「学者」へ転換した直後に対象は、それぞれの学問(科学)に固有の記述的基本概念によって規定されていることがわかる。逆にいえば、方法によって対象規定が行われるまえに、山本(1963, p.40)がいうように、その科学の対象領域が記述的基本概念によって限定されていなければならないのである。

その科学が真に科学的でありうるために必要な条件であり、また個々の科学の独自性を特徴づけることにもなるのである。地理学は、そのような諸科学の一つであって、そのなかで特別の地位を占め、特別の任務をはたすものではないのである。

社会科学の分科学としての(人文)地理学は、人間の社会に有意な係わりをもつ地表上の諸事物の空間的側面、すなわちそれらの分布ないし立地、空間関係、および空間的過程について研究する科学である。しかし、このように地理学を定義し、このような記述的基本概念によって地理学の対象領域を規定する見解は、フンボルト(A. von Humboldt, 1769-1859)とリッター(C. Ritter, 1779-1859)とによって基礎をすえられた近代地理学の歴史のなかで必ずしも常に主流を占めてきたというわけではない。むしろ、つい最近まで地理学において最も正統派とみなされてきたのは、今日「コロロジ(地誌)学派」とよばれている思想の系統であって、そのなかでもヘットナー(A. Hettner, 1859-1914)の概念と方法が支配的な地位を占めてきた。ヘットナーの地理学についての見解はその主著「地理学、その歴史、その本質およびその方法」(1927)にまとめられているが、松井(1966)によれば、ヘットナーは比較地理学=地誌を唱導したリッターの見解を受け継ぎ、さらにラッツェル(F. Ratzel, 1844-1904)の「生物学的、ときには機械論的環境論」の観点を地域研究に採り入れて、「地表上で異なる諸事物が関連し合って形成している地域の性格」を把握することをもって地理学=地誌の目的としたのである。そして、その見解はハーツホーン(R. Hartshorne, 1939, 1959)に踏襲され、主として彼の著書を通じて、合衆国のみならず、わが国にも伝えられ、地理学の研究に大きな影響を与えてきたのである。

地誌をもって地理学の中心課題とする見解は、地理学を法則樹立的な科学よりも個性記述的なものにしただけでなく、地理学の研究を地域地理学へ著しく傾斜させることにもなった。これに対してシェーファ(Schaefer, 1953, 野間訳, 1976)は、そもそもヘットナーやハーツホーンが先学達の見解を取り違えているのであって、フンボルトだけでなくリッターも「あらゆる空間的關係は法則に従っているという前提を受け入れていた」のであり、「それ以来地理学は、地表におけるある種の事象の空間的分布を支配している法則の定立に係る科学だと考えられるべきことになってきた」(P. 16)のだという。このことについてシェーファは、フンボルトやリッターの文献に依拠しながらも、どちらかといえば大局的に説述し、さらに「地域地理学と系統地理学がこの分野の分ちがたい、そして同じく不可欠な側面である」(P. 20)ことを明らかにしたのである。この論文が直接の発端となって、空間的

側面を重視する見解がその後の地理学研究のなかに急速に広がり、支配的な地位を占めるようになったのである。

多くの地理学の識者が指摘しているように、近代地理学の成立によって地理学がとり扱う対象は地表に限定され、今日にいたっている。この地表は単に地殻の表面だけを指すのではなく、リッター(1852)の表現を借りるならば“地上的(irdisch)に充たされている”とか、あるいは“物的に充填されている(dinglich erfüllt)”とか言い表されるような地表空間である(野間, 1963 P. 78)。リッターの考えに沿ってもう少し具体的に表現すれば、それは海洋・大陸・山岳・河川・平野などの自然的な事物だけでなく、産業・集落などの物質的事物や文化・歴史などの非物質的事物を含んだ人間現象によって充たされている地表空間である。そして、この地表の“事物の存在の同時的併存”の研究に限定されることによって、地理学は他の諸科学から自らを区別する方法と対象を獲得し、近代地理学として成立したのである(野間, 1963, P. 79)。

しかしながら、上述のように地理学のとり扱う事物が限定されても、地表の事物はまだ数限りなくあり、したがって一定の観点に立つことなしに、一定の事物を選択し、それらの同時的併存の研究にとりかかることは不可能である。しかも、地理学的に意味があると考えられる事物を選択する観点、換言すれば何を地理学的と考えるかによって選択される事物が異なってくるだけでなく、それらの同時的併存の取り上げ方もまた違ってくるのである。たとえば、地域分化を記述的基本概念とする地理学では、地表において差異をもつ事物が選択され、それらの共存関係と相互作用の確認を通じて地域の性格を把握し記述することが目的とされるのに対して、地上的な事物の空間的側面を重視する地理学では、理論仮説を導きの糸として事物の選択が行われ、同時的併存の研究にあたっては、事物そのものではなく、それらが組み合わさって地表空間を充たしている空間的な在り方ないしは空間的配列について考察することが地理学の任務であると考えられるのである。

このような“事物の存在の同時的併存”の取り上げ方の相違にもかかわらず、地理学の研究においては、それがとり扱う事物は単一の要素であれ、あるいは要素複合であれ、いずれも地表空間の一部を占有し、他の事物と有意な空間関係(あるいは関係位置)を有していると考えられている。そして、その在り方を把握するために、地表が人為的にさまざまに区分されたり、あるいは地表上でいろいろな範囲の設定が試みられるのである。このような地表の区域を地域とよぶことにすれば、ハーツホーン(1939)がいうように、それは単に“勝手に扱われた土地のかけら”にすぎないけれども、もしこの概念が地理学の本質を包括的に規定するようになれば、それ

は単なる技術的操作から遠ざかって、事物そのものの在り方との対決において、その空間的側面(あるいは地域の性格)を明らかにすることができるようになる、と考えられるのである。逆にいえば、地理学の研究では、究明しようとする事物の空間的側面(あるいは地域の性格)が把握できるように、地域区分ないし地域設定は行われなければならないのである。

(2) 均等地域と結節地域

人間の社会に有意な係わりをもつ地表上の事物は数限りなくあり、またそれらは相互に関連し制約し合い、かつ限りなく交錯している。したがって何らかの見地に立つことなくしては、一定の事物を選択し、それらを全般的な連関からきりはなして、その空間的側面を明らかにすることはほとんど不可能に近いといつてよい。ここに地理学がとり扱う事物を選択するにあたってまず理論・仮説が必要になり、さらにそれらを認識するための方法概念としての地域概念が要求されることになるのである。

地理学において地域概念は、斯学の研究対象の事実的な何かを意味しているのではなく、第一義的にそのものがいかにあるかを特徴づける方法概念として使用されている。つまり、それは地表上での諸事物の空間的な在り方を把握するための知的な枠組みであって、その実体は理論や仮説、あるいはポパー(Popper, 1957, 久野他訳)のいう“あらかじめ考えられた選択の見地”にしたがって選ばれた諸事物の空間的配置ないし複合体に他ならないのである。そのような事物の空間的な在り方を把握するために地理学の研究のなかで概念化されてきた最も基本的な地域概念として、われわれは均等地域と結節地域の2つを挙げることができる。

地表空間を充填している事物にはまったく同じものは何一つとしてなく、しかもそれらは千変万化する。しかしながら、それらの事物の地表上での在り方を考察するにあたって、多くの諸側面の差異を捨象し、性質や形状などのごく限られた側面の類似性に着目すると、ある種の均等性ないし一様性が認められる一定の広がり地表を区別できるようになる。たとえば、住宅街とか工場地帯とか呼ばれるもののように、それぞれの内部では住宅とか工場とかいった同質的な事物がある程度均等に存在し、しかもそれらが外部に対しては異質な事物の存在となって、その外側の地表と識別される区域である。このような均等性・均質性に着目して画定される地域が均等地域とか均質地域とか同質地域とか呼ばれているものである。

地理学の研究史のうへでは、まず均等地域の概念化が先行し、幾多の成果を収めてきた。しかし、この概念の適用によっては、地表上での事物の動態や機能連関などの空間的側面がとらえたいという限界があった。というのは、均等地域は機能よりも形態に重点をおいた概念だからである。結節地域とか機能地域とか名づけられている地域概念は、そのような側面の把握を重視して概念化されたものである。付言しておく、これは地表上での同じ事物の在り方を均等地域とは異なった視点からとらえようとするものであって、2つの地域概念は実証研究において一方が独占し他を排するというような二者択一的な関係にあるものではないのである。

さて、多くの研究者が指摘するように、上述のような事物の機能連関の問題を初めて理論的にとり扱ったのはフォン・チューネン(von Thünen, 1826, 近藤訳, 1928)であった。彼はいくつかの現実を高度に抽象化した独立国を想定して、中心都市との市場関係にしたがって異なる農業経営の立地(土地利用)が同心環状に配列することを理論的に導き出し、その後の農業立地論や大都市圏の土地利用・地代論の研究に多大の影響を与えた。しかしながら、この問題が結節地域・機能地域の概念化に向けて継続的に取り上げられるようになるのは、その後百年程たって、工業生産を基礎とする都市経済が発展し、農業においても都市住民向けの商品生産が活発になってからであった。都市が数と規模の両面において著しく成長するとともに、都市と農村との間に多様な関係が形成されるようになったことを反映して、都鄙関係の研究が盛んになり、殊に第二次大戦後、クリスタラー(Christaller, 1933, 江沢訳, 1969)によって体系化された中心地論を拠りどころに中心地と勢力圏に関する実証研究が積み重ねられるようになって、結節地域・機能地域の概念は次第に明確になってきたのである。すなわち、均等地域が外に対しては異質的であるが、内に関しては同質的な事物の存在によって区別されるのに対し、結節地域・機能地域は内において異質な事物の機能連関によって識別され、そこには機能連関の要となる事物の集積する中心地があって、その中心性が階層的秩序の存在を意味することになるのである。

ところで、森川(1980, pp. 171~172)によれば、中心地の階層性を議論する場合には、中心地機能施設の分析から生ずる施設階層と、中心地を核とする勢力圏の巣状構造に基づく勢力圏階層とを区別しなければならないという^{*)}。なぜなら、前者では中心地の階層区分だけが行わ

* 3 クリスタラーの中心地モデルでは、理論的には両者は同一視されていた。また実証研究では、いわゆるテレホンメーターや施設面に関するカタログ法が使用されただけで、補完領域の調査は実施されなかった。したがってクリスタラー自身は2種類の階層性の問題に気付いてはいなかったが、中心調査法と周辺調査法の併用による実証研究の時代に入ってから、両者の間に著しい差異のあることが注目されるようになったのである。

れるのに対して、後者では中心地と勢力圏からなる空間的単位の階層構造が究明されるからである。前者では成立閾人口という基本概念にもとづいて中心機能と中心地のグルーピングだけが問題にされるのに対して、後者では財の到達範囲 (range) という基本概念にしたがって勢力圏の境界の画定が要求され、中心地の空間的巢状組織が問われるのである。中心地論では本来、中心性は相対的中心性の意であって、具体的には中心地が補完地域へ提供する中心財を意味しており、したがって勢力圏階層はそれだけよりいっそう重要な概念であるといえることになる。そして、実際にこの概念を適用する場合は、各種の買物やサービス施設の利用についてアンケート調査を実施したり、あるいは電話通話や通勤通学などの単一指標による既存の統計資料を使用して、各勢力圏の境界が設定されているのである。

しかし、電算機の性能の向上と普及に伴って、この勢力圏の設定にさまざまな計量的手法が用いられるようになってから、以前には厳密な区別なしに使用されていた結節地域と機能地域との間にはっきりとした概念的な差異のあることが指摘されるようになった。森川 (1980, p. 420) によれば、調査域全域における各地区間の相互作用の空間的パターンが機能的距離法や因子分析法によって分析されるようになってからのようである。これらの手法では、特性の類似した地区をグルーピングして、その内部での各地区の相互作用や連結度が外部に対してよりも強くなるように地域の画定を行う。このような地域をブラウンとホルメス (Brown and Holmes, 1971) の定義にしたがって機能地域と呼ぶことにすれば、それは単一の中心地を核とする階層化した結節地域に必ずしも一致しないだけでなく、場合によっては類似の構造をもつ結節地域が一つの機能地域に統合されたり、反対に有力な副次的中心地を含む結節地域がいくつかの機能地域に分割されることにもなる。したがって、多くの場合には、機能地域と結節地域とはかなり接近したものになるとはいえ、階層構造に重点をおく結節地域と、地域を構成する各地区の機能的な相互補完や連結を重視する機能地域とは区別して使用されるべきであろう。

(3) 系統地理学と地域地理学

既述したように、今世紀初頭以降の地理学研究に大きな影響を与えてきたのは、まず第一にヘットナーの方法論であり、次いで基本的にはその継承とアメリカでの発展であるハーツホーンの方法論であった。これらの方法論に共通する特徴を要約すれば、地理学は統合科学であり、個性記述的な地誌的科学であるということだった。これに対してシェーファ (1953) は、地理学が他のあらゆる科学と方法論的に全く異なった総合科学、例外的事

例だけを研究する学問であると考えるのは間違っていると痛烈に論難したのである。この論文は、別稿 (加藤, 1979) で指摘したようにハーツホーン等の論説の個々の誤りの修正を目指したのではなく、地理学の本質を包括的に規定する記述的基本概念の変更の必要性を説いたものだった。

シェーファの論文を直接の発端とする地理学の革新運動は、その後の地理学研究に「革命」とよばれるほどの変化をもたらした。この変化は確かに、漸次的ではなく飛躍的であった。そして、この運動の根底に地理学の記述的基本概念の変更があったという意味であるならば、それは「革命」とよんでもよいほどの変化であった。総合・個性・記述・解釈にかかわって分析・法則・説明・予測が強調されるようになり、仮説・モデル・理論・計量が声高に叫ばれた。また、環境とか地域という用語にかかわって空間とかそれを修飾語に用いた表現が頻繁に使用されるようになったのである。

このような革新運動の進行は、一面では地理学の研究に新しい地平をきり拓いたが、他面では伝統的地理学の視点や概念のなかで継承・発展させていくべきものまでも捨てて一切省みないという風潮をうみだした。この原因は、変化が急激であったせいでもなければ、いわんやシェーファの論文にあるのでもなく、その大部分はその後の幾人かの地理学者達が地理学の変革をクーン (Kuhn, 1962, 中山訳, 1971) のいう科学革命にあてはめて方向づけたことに起因しているのである。

クーンによれば、パラダイムとは「一般に認められた科学的業績で、一時期の間、専門家に対して問い方や答え方のモデルを与えるもの」(p. V) であり、科学革命はこのパラダイムの変化によって起こるのである。しかしながら、クーン自身が訳書のために執筆した1969年の補章のなかで弁明しているように、初版においてパラダイム概念ほど「曖昧で、しかも重要な問題点を残すものはない」(p. 206) し、また「本書の主要点が他の分野にも同様に応用できると読み取った」人々の「意味することがよくわかり、だから、その試みの足を引っ張るようなことをしたくないが、彼らの反応の仕方には私には疑問に思われる点がある」(p. 240) といっているのである。この本でクーンが意図したのは、「科学の発展は、これまで普通に考えられていた以上に他の分野の発展によく似ているが、また決定的に異なった点がある」ので「そのような他の分野との差異を吟味して、その差異の説明に取りかかること」(p. 241) であったのである。パラダイム概念はそのために用意されたものであった。しかも、彼はすでに初版のなかで「社会科学の分野ではパラダイムというものが、はたしてできているかどうかさえまだ問題である」(p. 18) とも述べているのである。

このようなパラダイムの転換に地理学の変革をなぞらえることによって、「新しい地理学」の成立の根拠と研究の方向づけを「現代の科学哲学」にもとめた空間学派の先導者達にくらべると、シェーファは随分よかった。まず第一に、彼にはこじつけの理由づけは全く必要なかった。地上的な事物の空間的側面を規制する法則の追求をもって地理学の任務と考える見解がすでに近代地理学の成立当初からあったことを指摘するだけで充分であった。この指摘にもとづいてシェーファは、「事物が組み合わさって「地域を充たしている」そのあり方を記述し説明せねばならぬということ」(P.16)と「地理学の変数が、社会過程で演ずる役割を明らかにする」(P.46)ことに地理学の中心課題を限定したのである。第二に、シェーファは単に方法だけによって科学を規定しようとはしなかった。科学を自然科学と社会科学に分類して、後者のなかに地理学を位置づけたうえで、「自然地理学の法則」が「厳密には地理学的」ではなく、それらのうちの多くが「自然諸科学の中で独立して樹立された法則の特殊化」であることを指摘しているのであって、論理実証主義の統一科学の理念にしたがって人文地理学と自然地理学の統一を提唱したり、あるいは行動科学=社会科学としての地理学を確立しようとする見解とは根本的に異なっていた。第三に、シェーファは地域概念の放棄を主張するようなことは全然なかった。彼は地域というのが「現象の種類もしくは範疇の組み合わせに関しては、たしかに特殊でユニークな、しかもある意味で均質なものをもっている」(P.17)ことを認めたうえで、このユニークさは何も地理学にのみ特有なものではなく、結局のところは程度の問題であり、「さまざまな指標によって規定された一つの地域の内部、あるいは地域間に見られる合法的な空間関係」(P.42)について法則を追求する際の妨げにならないと主張し、地域概念を「地理学の最も基本的な概念」とよんでいるのである。第四に、シェーファは系統地理学と地域地理学という地理学の二元性が「地理学が方法論的にユニークな学問だ」という主張の根拠になりえないことを詳論し、「地域の科学的理解」を得るためには系統地理学と地域地理学がともに不可欠で、両者は相互補的な役割を担っていると述べているのである。この見解は地理学研究に対して経済基盤説がもっている意義を考察する際にとりわけ重要な意味をもって来るように思われるので、系統地理学と地域地理学がそれぞれ地域研究で果たす役割について、シェーファがどのように考えているかを詳しくみておくことにする。

シェーファに従えば、さまざまな指標によって規定された地域に見出される事物のすべてが地理学の研究で取り上げられるわけではない。それらの事物の非空間的関

係は他の専門家が扱う主題であり、社会学者としての地理学者は社会諸要因の間の空間的關係だけについて研究するのである。また、地域研究は単に地理学にだけ委ねられているわけではなく、他の社会学者達もまた地理学者と全く同じように、さまざまな諸要因を考慮に入れて、複雑な情況の地域研究を行っているのである。つまり、地域の分析を行う際にも、地理学者独自の任務は空間的關係の研究にのみ限定されているのであって、地理学者の仕事が終了した後においても、その地域の社会構造を理解するためにはなお多くの仕事が残されているのである。それゆえ、地理学が異質の事物の総合をなしとげることによって、科学のなかで特別の地位を占めていると主張することはできないのである。

社会科学としての地理学が社会的要因の空間的關係を規制する法則を追求するのは、ある区域に一つの単位としての性格をもたせ、それを地域たらしめている諸関係を究明するためである。その際、系統地理学は、どんな種類の法則を求めべきであるかについて地域地理学から指針を受けとり、二つ以上の限られた種類の事物の間にある空間的關係を一般化して法則の樹立を目指すのに対し、地域地理学は系統地理学が公式化した規則と法則を用いてある地域のいくつかの特徴の説明にあたり、系統地理学に資料と指針を提供するのである。

文 献

- 1) 加藤英生(1979): ハーツホーンの地理学の見解に関する覚書, 名古屋工業大学学報, 31, 29~38.
- 2) 戸坂 潤(1929): 科学方法論, 『戸坂潤全集 第一巻』勁草書房, 1~114.
- 3) 戸坂 潤(1935): 科学論, 『戸坂潤全集 第一巻』勁草書房, 115~227.
- 4) 野間三郎(1963): 『近代地理学の潮流』大明堂.
- 5) 松井武敏(1966): Hettnerの地理学の見解に関する断想, 名古屋大学文学部研究論集, 史学14, 207~216.
- 6) 森川洋(1980): 『中心地論 I, II』大明堂.
- 7) 山本信(1963): 全体と自己への問い, 田中美知太郎編『講座哲学大系 第1巻』人文書院, 38~50.
- 8) Brown, L.A. and Holmes, J. (1971): The delimitation of functional regions, model regions, and hierarchies by functional distance approaches. *Journ. of Reg. Sci.*, 11, 57~72.
- 9) Christaller, W. (1933): *Die zentralen Orte in Süddeutschland*. Jena. 江沢謙爾訳(1971): 『都市の立地と発展』大明堂.
- 10) Hartshorne, R. (1939): The nature of geography. *A.A.A.G.*, 29, 171~658. 野村正七訳(1957): 『地

- 理学方法論』朝倉書店。
- 11) Hartshorne, R. (1959) : *Perspective on the nature of geography*. John Murray, London.
 - 12) Hettner, A. (1927): *Die Geographie, ihre Geschichte, ihr Wesen und ihre Methoden*. Breslau.
 - 13) Kuhn, T. (1962) : *The Structure of Scientific Revolutions*. 中山茂訳 (1971) : 『科学革命の構造』みすず書房.
 - 14) Popper, K. (1957) : *The poverty of historicism*. 久野収・市井三郎訳 (1961) : 『歴史主義の貧困』中央公論社.
 - 15) Ritter, C. (1852) : *Einteilung zur allgemeinen vergleichenden Geographie, und Abhandlungen zur Begründung einer mehr wissenschaftlichen Behandlung der Erdkunde*. Berl. (筆者未見).
 - 16) Schaefer, F.K. (1953) : *Exceptionalism in geography : a methodological examination*. *A.A.A.G.*, **43**, 226~249. 野間三郎訳編 (1976) : 『空間の理論』古今書院, 14~47.
 - 17) Thünen, J.H. von (1826) : *Der isolierte Staat in Beziehung auf Landwirtschaft and Nationalökonomie*. Jena. 近藤康男訳 (1974) : 『孤立国』(『近藤康男著作集 第一巻』農林漁村文化協会, 35~472).